

## 西川美和『ゆれる』——二つの三角関係における母親の存在——

百瀬 奈津美 MOMOSE, Natsumi

## 1 問題設定

小説『ゆれる』は、映画監督である西川美和が、日本映画大賞を受賞した自作映画を小説化した作品である。東京で写真家として成功した弟・猛と、郷里で家業を継いだ兄・稔。この二人の関係が、共通の幼馴染である智恵子の死をきっかけに揺れ動く様子が描かれる。

『ゆれる』には主要な登場人物として数人の女性が登場する。その中でも目立って重要な役割を担っているのは智恵子だが、それと同程度に重要な役割を持っているのは、早川稔・猛の母親（以下、早川母）ではないかと考えられる。猛と稔の共通の幼馴染である智恵子は、恋愛の対象として、また、事件の被害者として猛と稔の間に存在し、物語の中で重要な役割を担っている。対して、早川母が作中に登場する回数は少なく、その全ては他者による回想で語られている。しかし、早川母が作中に登場する部分を見て

いくと、その描かれ方には、彼女個人について語ったものと、彼女を引き合いに出すことで他の主要な登場人物のことを語ったものがあることが分かる。特に後者に関しては、猛から稔、稔から猛、智恵子から猛へと、早川母を媒介として相手を見る視点があることが本文中からうかがえる。早川母は智恵子とは違った形で、登場人物達の間に立ち、その関係に影響を与えていると考えられる。小説の本文を引用しながら、早川母の持つ役割について考察したいと思う。

## 2 二つのトライアングル

『ゆれる』には稔と猛、智恵子が形作る恋愛を軸としたトライアングルと、その変奏である稔と猛、その父・勇が形作る家族関係のトライアングルが描かれている。早川母はこのトライアングルを形作る役割、つまり、早川家を一つの所に集める媒介としての役割と、稔、猛、智恵子の三人を再会させる媒介としての役割

を担っている。

最初に、家族関係のトライアングルにおいての早川母の働きについて考える。作品の冒頭、猛が長い間離れていた家に戻った理由は、母親の法事に出席するためである。一人東京に出ていた猛が実家に帰ることで、父親と兄弟の、三人の家族が顔を合わせることになる。宴席では猛と勇が早川母の遺影を引き合いに親子喧嘩をすることで、良好とは言えないが、親子の関係は猛が家から出ていく以前と同じ関係へと戻っている。この時点で一度、家族は一所に集まっている。

しかし、その後起こった智恵子の死亡事件において、猛の証言によって稔の罪が確定し、一家は離散する。バラバラになった家族は七年後、猛が出所する稔を迎えに行こうと決心することで、また一つの場所に集まろうとする。猛の決心のきっかけとなったのは、法事ときに稔から渡されていた早川母の遺品である8ミリフィルムと映写機である。猛が再生したフィルムは、彼が五歳の頃に家族で行った見聞溪谷での思い出を記録したものだ。

「父は俺を愛せない」という観念を否定する、楽しみに自分たち子供とはしゃぐ若い父親の姿や、手を取り合って岩場を登り、吊り橋を渡っていく幼い兄弟の姿を見た猛は、兄・稔を迎えに行くために部屋を飛び出す。結局、一家がまた一つの場所に集まることが出来たのかはわからないまま物語は幕を閉じるが、それでも、早川母は一家が集まるためのきっかけを作り出している。

また、もう一つの重要なトライアングルである稔、猛、智恵子

がガソリンスタンドで再会するのにも、早川母が一役買っている。冒頭部分で、稔が継いだガソリンスタンドに母親の法事で帰省した猛がガソリンを入れるために立ち寄るが、そのガソリンスタンドでは智恵子が働いている。第二章の「高校を卒業してから勤めていた建築事務所が倒産してしまって職場を失っている時に、母からそのことを聞いたおばさんが、自分のところのガソリンスタンドに来てみないかと私を誘ってくれたのです。」という智恵子の語りからわかるように、彼女にスタンドでの仕事を世話したのは早川母である。猛は智恵子には気づかなかつたふりをしてガソリンスタンドを後にするが、法事が終わった後、稔がクレーム客の対応のために智恵子に呼び出されたことで、稔と猛は智恵子のいるガソリンスタンドへと向かうことになる。猛はスタンドでの稔と智恵子の親密な様子に嫉妬し、その夜のうちに智恵子と関係を持つ。稔はそれに気付きながらもなにも言わない。高校生の時には猛と智恵子、猛が家を出てからは稔と智恵子という一対一が成り立っていた関係は、三人が再会したことで変化する。三角関係には狂いが生じ、事件へとつながっていく。

このように早川母は作品の冒頭部分で、家族のトライアングルと、恋愛のトライアングルの二つのトライアングルを作り出すきっかけとなっていることがわかる。

また、早川母は、このトライアングルを形成する人物一人一人に様々な形で影響を与えている。

## 3 早川母の与えた影響

先に、猛から稔、智恵子から猛、稔から猛へと、早川母を媒介として相手を見る視点があることを論じたが、そのことについてそれぞれの人物が早川母に対してどのような感情を持っていたのかも含めて考察していきたい。

まず猛は、早川母に対して否定的な感情を持っていたように読み取れる。『ゆれる』は、猛が母親の見舞いに行った時の回想から始まる。

扉を開けると、他人と他人のベッドの間に、母の居る場所があった。

洗面器から顔を上げた母は、棒立ちになっている俺の姿に氣付いた途端、嘔吐の息苦しさとまた別の赤みをその頬にぱつと浮かべて、ごまかすようにえへへと笑って見せた。

やり切れない時に限って笑って見せる。そんなのばかりを見て育ったような気がする。

この母親の描写からは、人と人の間の狭い空間に身を置き、自分が苦しいのをごまかそうとし続けてきた母親の姿がうかがえる。物語の冒頭でこうした早川母に対する評価が語られることによつて、その後、猛が母親について語るときにはこのネガティブなイメージが想起させられるようになる。こうした早川母に対す

る厳しい評価は、法事に遅れてやってきた猛が自分を見る法事の参加者たちの目を前に、「この眼。押し黙ったまま、毛穴の奥まで針で突き刺すような、しつこくて、悪意に満ちた。この消極的な暴力におびえ、身を強張らせ、哀れっぽく暗がり息を潜めていた俺の母親。蛆虫の人生。」と考えている場面にも見られる。

父親である勇との喧嘩の時に「可哀相だなんて、一体どの口が言うんだよ。こんな、さすがごびりついたような家に（母を…百瀬註）押し込めて、何十年もガソリン臭え中で朝から晩まで働かせ」と言っていることから、猛が母親に対して、家に押し込められても文句ひとつ言えずに縮こまっているという印象を受け、それを嫌っていたことと、母親と同じ人生を歩むことを拒否していることが分かる。こうした嫌悪感、猛が家を出る時に早川母に向かって「ここに居ても何もないことがないように思うのは、母の人生を見てきたからだ」と、母親の人生を否定する言葉を口にしたことに最もよく表れている。

このように早川母の生き方に不快感を抱いていた猛は、高校生になると同時に家を飛び出し、東京へと行く。「将来のことなんて、まともに考えたこともなかった。ただ「やりたくないこと」だけは、ここに残ってスタンドで働くことだと決まっていた」猛は、「けれど最初に、闇雲にであれ自分の進む道に写真を選んだのは、中学の頃に母の生家で古いローライフレックスの二眼レフカメラを見つけて、手にしたのがきっかけだったのかもしれない。」と当時を振り返る。猛が語る母親の回想の中で、早川母が

生き生きと描かれているのはこのカメラに関する件りのみである。母親の人生を見てきたことから実家に居続けることを拒否した猛は、家を出てからの生き方を澁刺とした母親との思い出である写真に求めている。早川母は、猛に「家を出ていくこと」に関して影響を与えていると言える。

また、猛が母親に対して持っていた否定的な感情は、稔を見る猛の視線にも影響を与えている。猛は、自分が逃げ出した家に関する煩わしさを文句も言わずに背負っている稔に対して、「声を上げず、身をよけもせず、最後は大損を食らうという、母から受け継いだらしいその「こらえ性」みたいなものが、俺には苛立たしい。」という感情を持つている。猛は自分が東京に行くというのに、「ただ先に生まれた子供だからという理由だけで、全ての煩わしさを背負わされることに関して兄が何の疑問も抱かないでいるのが、俺にはやはり不思議でならなかった」だけでなく、そうやって家に縛り付けられる稔に対して母親を重ね、母親に抱いていた嫌悪感と同じものを感じていると考えられる。母親と稔を重ねるシーンは他にもあり、稔が告白をする前夜のことを、猛は「大丈夫だから。俺は、大丈夫」／しっかりとした口調でそう言っていて、もう一度照れたように笑って見せた。俺の知っている兄の照れ笑いだった。母が死ぬ前に見せたあの笑い方とそっくりだった。」と語っている。死の直前の母と、この後法廷に立ち、猛の証言によって有罪を受ける稔。猛は稔の中に幾度も母親を見ているが、どれもネガティブな印象のものばかりである。

その猛とは逆に、智恵子は早川母に対して好意的な感情を抱いていたと言える。智恵子は小学生の自分が稔と猛の家に誘われるままに上がり込んだ理由に、早川母が優しくかったことを挙げている。

私が誘われるままにお宅に上がり込んでいたのは、猛君たちのお母さんが、私にとっても優しくかったからです。きれいな色の紅茶を出してくれたり、夕食のお手伝いをさせてくれたり、刺繍を教えてくれたり、「女の子はいいわ」と口癖のように言つて、母が迎えに来るまで、ずっと傍にいてくれました。

という智恵子の語りからは、早川母との間に心地よい思い出があったことが分かる。「おばさんもお店で働いていましたから、身なりもきちんとしていたし、客商売の人特有の明朗さがありました。」という描写からも、早川母に対する好意を読み取ることができる。早川母に対して好意を持っていた智恵子は、早川燃料店で働くようになってから、身体を壊してしまった早川母の世話をすることを苦に思うこともなく、「おおらかで、ユーモアがあつて、おばさんのことが好きだったんです。そんなことをしている内に、ぼんやりと、私、このお家に入るのかな、と思うようになりまして。」と、早川母の世話を通して早川家の一員となることを考えている。それでも、智恵子の思いは「けれど私は、あの人（猛・百瀬註）にそっくりな、おばさんの目が大好きだった。」

という一文から分かるように、早川母を通して猛へと向かっている。早川母は、智恵子を早川家につなぎとめると同時に、猛のこゝとを忘れさせないよう仕向けている。

猛、智恵子とは違い、稔が早川母について語った場面はない。だが、稔が猛と母親の共通点を挙げているシーンはある。猛が出所した稔を迎えに行く決心をするきっかけとなる映写機を形見分けしてもらった時、映写機のデザインなどを評価する猛に対して、稔は「お前のそういうのは、完全にお母さんだね」と言っている。稔もまた、早川母と重ねることによって猛を見ている。

夫である勇は、早川母に「あなたが人を責めるから、相手も牙を向くんですよ。」と指摘されたことを通して、自分の持つ弱い部分、ひいては猛に圧迫感を感じさせている部分を語っている。この前後では、幼い頃に身体が弱かった稔のことや丈夫に産まれた猛のことなど、兄弟のエピソードが勇の口から語られることで、父から子への愛情が描かれている。その一方で、カツとなった時には「責めて責めて、他人を目の前で自分よりも弱らせて、浮かばれた気になる」ために、息子や妻を責めてしまう自身のことを独自させている。頑固で息子に対して高圧的なイメージのある勇という人物が持つ弱さが語られ、親子のトライアングルに厚みが与えられている。

以上から、早川母が物語を構成する上で重要な二つのトライアングルを作る四人に、なんらかの形で影響を与えていたことがわかる。

#### 4 まとめ

ここまでの議論を通して、早川母が、物語の中で重要な二つのトライアングルを作るために働きかけていたことと、そのトライアングルを作る人物それぞれに影響を与えていたことがわかった。このことから、早川母は『ゆれる』において「枠組み」を作る役割を持っていたのではないかと考えられる。登場人物達は早川母の法事をきっかけに集まり、「家族関係」と「恋愛関係」の二つのトライアングルを形成する。この『ゆれる』という物語は二つのトライアングルによって動かされ、特に両方のトライアングルに関係している猛と稔は、二つの立場から相手に接することとなる。こうした人間関係の中では、早川母が各人に与えた影響が少なからず作用している。猛は早川母を通して稔を、稔と智恵子は早川母を通して猛を見ていることから、それぞれの人物のイメージに早川母が組み込まれていることがわかる。物語の大枠であるトライアングルと、その三角形の中で人から人へと向けられる感情の内容は、早川母の働きかけによって作られているといえる。

映画、小説共に、早川母は登場シーンも台詞もなければ、名前も出ない。登場人物としての重要度は著しく低いように見受けられる。しかし、先に論じたように、小説において登場人物達が彼女について語る個所は多く、そのたびに、登場人物達は彼女越し

に別の人物のことを語っている。猛は家に縛られた母親越しに、自分をも縛りつけようとする勇を、母親と同じように縛り付けられている稔を見ている。稔はカメラというキーワードをもとに母親と猛を結びつけ、勇は早川母に諫められた欠点を抱えながら息子に接している。智恵子は早川母によって稔の傍に繋ぎとめられながらも、早川母を通して猛の姿を追い続けている。小説に描かれた登場人物の思考や言動の端々には、早川母の存在がある。

そうして繋がれた関係性のトライアングルは、智恵子の死の事件をきっかけに、「早川母」というクツションを置かずそれぞれの人達を関係づけ始める。早川母によって猛、稔、智恵子の三人が集まったガソリンスタンドから、三人の持つ剥き出しの恋愛感情が交差し合い、恋愛のトライアングルは揺らぎ始める。智恵子は稔に不審を抱き、稔は猛と智恵子の関係に嫉妬をする。猛はその煩わしさから目を背けようとするものの、事態はそれを許そうとはしない。智恵子の死によって恋愛の三角関係は破綻し、猛と稔は家族関係のトライアングルの中で互いに向き合うことになる。稔は今まで背負わされてきた多くのことに関して猛に怒りを見せ、猛は、母親のように耐えているだけだと思っていた兄の変貌に動揺する。勇はそれまでの接し方では稔と猛に対応しきれなくなり、三角関係の中で父親としての力を発揮することができない。猛と稔は早川母によって作られた二つの枠組みの中で衝突しあい、最終的に、猛が稔の罪を告発するという形で二つの三角関係を完璧に破綻させる。この破綻した三角関係は、また、早川

母の働きかけによってその枠組みを形作られ始める。早川母が残した、家族の思い出を記録した紙袋いっぱいフィルムが、家族の三角関係の再生の一助となっている。

人物間の感情は早川母を通して形作られ、早川母を通さないと、登場人物双方に向けられる感情はそれまでには見られなかった一面を相手に突きつける。早川母は二つのトライアングルを作り、その中で登場人物達が相手を見るために必要なフィルムとしての役割も担っている。物語を動かす三角関係を形成する上で、早川母の存在は不可欠なものであると言える。

※引用は、西川美和『ゆれる』（ポプラ社〔ポプラ文庫〕、二〇〇八・八）に拠った。